

2022年2月13日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司会 山田紀子

奏楽 永井 花

前 奏

招 詞

I テサロニケの信徒への手紙 第2章13節

讃美歌

讃美歌 21-16 (われらの主こそは)

交 読

詩編 第8篇 (p. 10)

祈 禱

聖 書

マルコによる福音書 第15章42~47節

(新約 p. 96)

讃美歌

讃美歌 21-59 (この地を造られた)

説 教

「神の国を待ち望む」

イエスさまの十字架の死と復活のふたつの大きな出来事
の間に挟まれたこの僅か数節が語っていることは、静かな埋葬
の出来事でした。当時のエルサレムには、大きな共同墓地のよ

うなものはないようでした。ただ市街を囲む城壁の外、城壁から少なくともほぼ 25 メートル以上離れたところの私有地にそれぞれに葬られました。どこの世界でも同じだと思いますが、死者は忌み嫌われ、遠ざけられたからです。けれど、たとえそうであっても、一人の人が亡くなれば、それを悼む人々の葬列が作られますし、悲しみの涙が流されることも当然です。葬儀は、亡くなった人がどのような人であったかを改めて知ることのできる良い機会でもありました。だとすれば、イエスさまの場合はどうでしょうか。主イエスの葬儀は、葬儀の名にも値しないほどのものであったことに改めて気づくのではないのでしょうか。この時埋葬を引き受けたヨセフは、「**勇気を出して**」ピラトのところに出かけて行ったとあります。世間から冷たくあしらわれることを覚悟する勇気が無ければできないような葬儀だったということです。何よりも弟子たちの誰一人できませんでした。弟子たちにはその勇気がありませんでした。また、最後まで忠実であった婦人たちもここでは見守るしかありませんでした。

旧約聖書の申命記第 21 章 22 節には、こういう言葉があります。「ある人が死刑に当たる罪を犯して処刑され、あなたがその人を木にかけるとすれば、死体を木にかけたまま夜を過ごすことなく、必ずその日のうちに埋めねばならない。木にかけられた者は、神に呪われたものだからである」。ですから使徒パウロはこの言葉を思い起しながら、「キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださいました」とガラテヤの信徒への手紙第 3 章 13 節に書きました。改めて主イエスの死がどのようなものであったかを思われます。十字架の死がどのようなものであったかは、その十字架から降ろされた肉体の葬りにさえ現れています。呪われた死とは、捨てられた死ということでした。人から捨てられた死です。そして実は、これがわたしたち罪人の死の実相、実際の姿なのです。しかもそれだけではありません。人から捨てられる以上に、神から捨てられる、神に捨てられるということはそれよりももっと、遙かに厳しいことです。

イエスさまが死なれたのは、金曜日の午後でした。「準備の日」と呼ばれています。ユダヤの暦では、日が暮れば、もう新しい次の日になってしまいます。ですから、その日その夕方から始まる安息日には、働くことが禁じられています。本格的な料理をすることも禁止です。そうだとすれば、前日までにやるべきことをきちんとしておいて、安息日には働かなくてもすむように準備をしておかなければなりません。それが金曜日
を「準備の日」と呼ぶ理由のようです。先ほど紹介した申命記にもありましたように、息を引き取ったイエスさまのみ身体を夕方になって新しい日になるまえに葬らなければならない。そのことに何とかしなくてはと心をかけた人たちもいたと思います。例えばイエスさまの死を見守っていた婦人たちです。けれど、女性ではどうしようもなかったかもしれませぬ。処刑された者のからだは、その親しい者に引き渡されたようですが、そのためにはピラトの許可をもらわなければなりません。45節の「遺体をヨセフに下げ渡した」という表現は、明らかにお役所言葉です。役所には役所のやり方があることをわたしたちも知

っています。手続きにおいていろいろと事柄が運ぶためには、面倒な場合だってあります。そういうことをよく知って、心得ている人物がここに現れました。それが、「アリマタヤのヨセフ」です。

アリマタヤというのは明らかに地名ですが、どこを指しているのかは、実はもうよく分からなくなっています。サムエル記上第1章1節に記されている、預言者サムエルの父エルカナの出身地ラマタイムが、このアリマタヤのことではないかと言われますが、これも確かではないようです。ただ一つはっきりしているのは、このヨセフは最高法院の議員であり、身分も高く、また富裕層の人でした。そして何よりも重要なのは、「この人も神の国を待ち望んでいた」と記されていることです。どうしてヨセフがイエスさまのご遺体を葬ったのか。その動機は何だったのか、それをマルコによる福音書の記述から読み取ることにはできません。少なくとも、その心中の思いを表す言葉はないからです。けれど、福音書を書いた人からすれば、神の国

の望みを捨てない人だったということで十分だったのではない
でしょうか。あるいは「この人も」と言うだけで、ヨセフの動
機を十分説明できると思ったではないでしょうか。そして「こ
の人も」という以上は、誰かと同じだということです。まずそ
れは福音書を書く自分自身です。福音書を書いた教会です。そ
の教会に集まる者です。そしてわたしたちもそうです。神のご
支配を待っています。そしてあのヨセフも、わたしたちと同じ
ように神さまのご支配を待ち望んでいた。それを望みとして一
所懸命生きていた人でした。神の支配を受け入れていたの
です。その実現を待ち望んでいたのです。イエスさまのことをど
こまで知っていたのかは分かりません。弟子の一人であったと
は言えないようです。イエスさまが十字架にかかれる直前、
最高法院で裁判を受けておられたとき、そこにいたのかどう
か、どういう態度を取っていたのかも分かりません。イエスさ
まの十字架刑に処刑人という立場で立ち合っていた百人隊長
が、イエスさまの死を直視しながら「本当に、この人は神の子
だった」と言い表したように、ヨセフもイエスさまの死を見て

初めて心動かされて、埋葬を決意したのかもしれませんが。ただいづれにしても、推測するしかありません。そのうえで、明らかかなことは、このアリマタヤのヨセフの心の内に、神の国、神の恵みのご支配を願い求める望みの火を神さまが灯してくださいということです。神ご自身が、主イエスの地上におけるみわざを完成させるために、ここでこのヨセフを用いて埋葬をさせておられるということです。十字架で死なれた主イエスのみ身体は、そのままでは無力です。誰かが運ばなければなりません。力衰えたイエスさまに代わって、その十字架を無理にも担がせられたキレネ人シモンを思い起すことができます。ここでも、思いがけないかたちで、主イエスと真っ向から対立すると思われたユダヤ人指導者の一人が、自分の名誉や地位を賭けてピラトの前に膝を屈め、イエスさまの遺体を請い、明らかに自分の墓地であったと思うところに葬ります。考えてみると、とても不思議なことです。イエスさまに一番近かったであろう弟子たちは、みんなバラバラに離れ去ってしまい、このイエスさまの地上のご生涯で最も重要なところで何の役にも立っていま

せん。役に立たないどころか、そばにいませんでした。いいえ、居ることができなかつたのです。それに対して当時、今日からすれば考えられないほどの差別を受けていた女性たちが、イエスさまのそばにいつもいました。異邦人の百人隊長が虚心、先入観などにとらわれずに目の前のイエスさまをそのまま十字架の主イエスを賛美しました。神の子としての主イエスを認めました。この言葉がマルコによる福音書の頂点にあると言ってもいいほどです。そしてこのヨセフのイエスさまに対する敬愛の心を込めた埋葬のわざが始まります。ただしそれは、絶望のわざではありませんでした。望みの心を秘めた行いでした。百人隊長が口で言い表したことを、ヨセフは、その行いで証ししているとも言えます。

ところでマルコによる福音書がここで、特に丁寧に語っていること、そのひとつは、イエスさまが本当に亡くなった、死んだのだという事実です。仮の死ではありませんでした。そのことをピラトが確かめたことをきちんと書いています。しか

もイエスさまの死があまりに早く、確かに死んでおられたという
ことに「驚いた」と書いています。44 節の「不思議に思い」
というのは、「驚いて」と訳していい言葉です。第 15 章 5 節で
は、イエスさまが裁判の席で何も答えられないのを「不思議に
思った」とありますが、これも同じ言葉です。主イエスの存在
に潜む「不思議なもの」に驚いたのではないかと思います。神
が主を確かに死に渡されたのです。百人隊長が死を確認したの
ちに下げ渡された主イエスのみ身体をヨセフは、捨てられるべ
き呪われたからだとしてではなく、丁重に葬りました。こうし
て主イエスは確かに死者の中に入れられたのです。こうして安
息日の間、まったくの静かな時が訪れるのです。

福音書の記事としては、確かに 6 節の短い記事です。す
でに読んでみまましたように、マルコ福音書は小さな言葉遣い
にも心を用いて書いています。そうであってもやはり、静かな簡
潔な書き方になっています。けれど、ここで語られていること
は、わたしたちの信仰にとってはとても深い意味をもったもの

です。わたしたちが洗礼を受ける時、あるいは聖餐式の前に唱和する、告白する使徒信条には、「死にて葬られ」という言葉がきちんと入っています。キリストの教会が伝道と信仰の歴史を始めてのち、ずいぶん長い間、この主イエスの死がしばしば神学論争になりました。まことの神であったイエス・キリストが、わたしたちと同じように死ぬということなど受け入れられないという思いが、何度でも語られました。ハイデルベルク信仰問答は、このことについてこう言います（問い41）。問い、「何故、主は葬られたのですか」。答え、「まことに死んでしまった、ということ、を、証しするためです」。この問答は、これだけのことを言います。どれだけ重要なことかが分かります。主イエスがまことの人になられたということは、「まことに死なれた」ということを含んでいます。しかも、このことがどれほどわたしたちの救いにとって、信仰にとって大切な、重要なことだろうかと思います。

ヘブライ人への手紙は、第2章14節以下でこのように述

べています。

「ところで、子らは血と肉を備えているので、イエスもまた同様に、これらのものを備えられました。それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるためでした。確かに、イエスは天使たちを助けず、アブラハムの子孫を助けられたのです。それで、イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです。事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることがおできになるのです」。

ここで聖書は、主イエスは天使たちを助けず、わたしたちを助けてくださった、と言います。そのために「天使たちよりも、わずかの間、低い者とされた」、つまり「死の苦しみ」を知る者となってくださったと言います（9節）。イエスさまが人となってくださったということは、この死に至るまでわたした

ちと等しくなってくださったことを意味します。わたしたちが誰一人例外なしに死すべき者、死を迎える者だということは、とても重く厳しいことです。わたしたちが死の恐怖の奴隷であるというヘブライ人への手紙の断定を受け入れざるを得ません。けれど、そうであるからこそ、主イエスは、わたしたちの、その奴隷状態までも共に知っていただきました。Iテサロニケの信徒への手紙で使徒パウロはこう書き記しました。「主は、わたしたちのために死なれましたが、それは、わたしたちが目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようになるためです」(5:10)。この目覚めと眠りは、わたしたちにとって生と死とを意味するとも理解されています。死においてもわたしたちは主と共にあるのです。

このアリマタヤのヨセフがその後どうしたかは分かりません。けれど許されるならこういう想像もあるのではないかと考えています。ヨセフは、イエスさまを自分が葬られる所に葬りました。大きな穴です。その穴の中に、やがて自分も葬られ

る、そういう余地があるお墓です。そこに、イエスさまのみ身体を部下に手伝わせながら納めながら、心の内に、やがて、わたしもここに納められると思う。だから、このヨセフが、翌朝、噂を聞きつけて駆けつけてきたかもしれません。やがて自分の墓を、もう一度訪ねたときに、その墓の入り口に置いた石が転げて除かれてしまった。イエスさまのお姿がそこ不在に、本当に驚いたと思います。そして、神の国、神の支配を賛美したと思います。主イエスは、そのようにわたしたちの兄弟になってくださった。甦りのいのちに生きる者として死なれ、葬られてくださった。わたしは、このヨセフが、神の国を待ち望みながら自分の墓地に立ったときに、彼自身、知らずして、その甦りのいのちの虜になっていたということまで言ってもいいだろうと思います。

だとすれば、既に、このイエスさまの葬りの物語を十字架の死と切り離して読むことができず、むしろ、それとの深い結びつきにおいて読んだように、わたしたちもまた、主イエス

の葬りを、これに続く復活の出来事とも切り離すことはできません。このとき、ヨセフのする葬りのわざを見守り、主イエスの墓のありかを確かめた女性たちが、安息日を過ぎた朝に再びそこを訪れた時、この墓が空になったことを認めます。主イエスの確かな死を見留めた女性たちが、主イエスの復活の証人ともなります。ここにも神さまのなさりようの不思議さを思います。わたしたち自身が驚かざるを得ません。主イエスの死は、復活すべき方の死でした。だからと言って死の重さが変わるわけではありません。主イエスの死の重みが、苦しみが減るわけではありません。そうではなくて、そのいのちへの導き手の真実の死であり、父なる神がこの主イエスを甦らせておられるからこそ、わたしたちは、この主の葬りの出来事、物語を、まさしく神の国、死の国を滅ぼす神の支配の出来事として受け入れるのです。お祈りいたします。

キリスト者ではなかったユダヤ人、主イエスを十字架につけた者と数えられた者のひとりが、深い思いをもって主イエ

主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>